



# 在野の知のひろがりへ

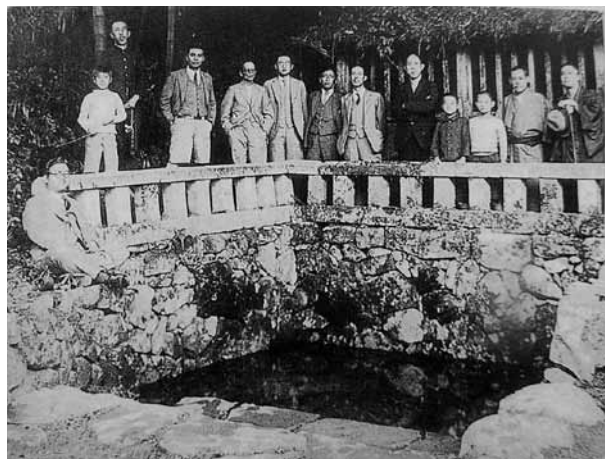
しげのぶ ゆきひこ  
重信 幸彦  
北九州市立大学教授

この国の文化人類学や民俗学の揺籃期といわれる1930年代、それらはいずれも、大学や研究所に拠点を置く学問ではなく、在野の知性のゆるやかな参集として展開していた。今年10月に始まったあらたな共同研究「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動」は、そんな当時の在野の知のありようを約2年半にわたり明らかにしていく。

## 小倉郷土会と「民間伝承の会」

一九三六（昭和一一）年四月二四日の午前中、「小倉郷土会」の会員・川崎英一は、宗教学を学ぶ若い学徒、杉浦健一を案内し、福岡県戸畑市（現・北九州市戸畑区）の鞘ヶ谷を訪れた。杉浦健一が「工業地に残された古い姿の農家を見たい」と希望したからであった。

小倉郷土会は、一九三四（昭和九）年ころに、小倉周辺の市井の人びとにより結成された郷土研究の運動体であった。当時、小倉でさまざまな文化運動にかかわっていた耳鼻科医・曾田共助の書齋に、地域の若い衆が自由に入入りし形成された、サロンのような場が拠点となっていた。一方、杉浦健一は、東京帝国大学大学院で宗教学を専攻し、そのころは、柳田國男が民俗学というあらたな学問をかたちにするために一九三三（昭和八）年から自宅書齋で同好の士を集めて始めた勉強会を起源とする「民間伝承の会」の同人であった。その後、杉浦は、一九三八（昭和一一）年ころから、日本の南洋庁の嘱託としてミクロネシアの調査などに従事し、戦後は、東京大学教養学部にてきた文化人類学教室の初代教授になる。五〇歳という若さで亡くなるが、杉浦は、今日のアカデミズムの文化人類学の礎を築いた一人であった。



小倉郊外に出かけた小倉郷土会のメンバー 1935年秋ころ  
馬渡博親 編『小倉郷土会のあゆみ』（2002）より転載

## 知の邂逅の閃き

川崎は、この杉浦との散策について、杉浦の調査の仕方や二人で交わした話題を、小倉郷土会の機関誌『豊前』（第五号）に「杉浦健一氏と歩く」として書き残している。

二人の話は、「自から柳田國男」の話になった。杉浦は、柳田の数多い著作のなかでも、『都市と農村』（一九二九）と『明治大正史世相篇』（一九三一）が、自分にとっては「有益な著作で、民俗学をもつと此の方面に発展させたい」といったという。工業都市、港湾都市そして軍都として急速に都市化しつつあった北九州地域

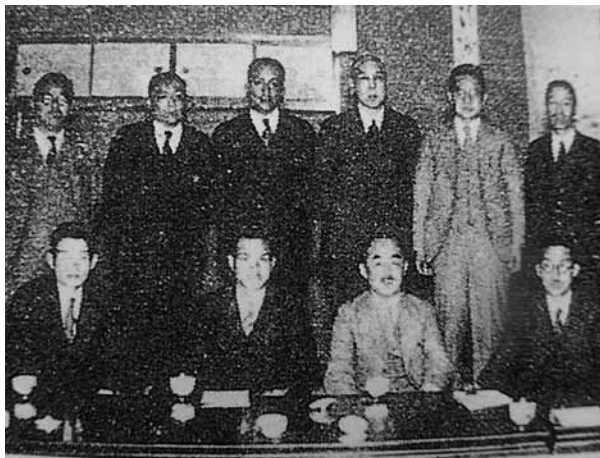
を配慮した杉浦の発言だったのだろうか。川崎英一は、それを印象深く受け止め記している。

都会の商人の論理が農村の日常を包摂し、否応無く変容させていく軋みを、当時の農村疲弊の根源的な原因として見据えたそれらの柳田の仕事が、民俗学の間で注目されるようになるのは、ようやく一九八〇年代のことである。二人の邂逅に刻まれた知の交歓の閃きは、学史をはるかに先取りしていたのである。

## 在野の知のひろがり

もちろん、ささやかなエピソードにす

柳田國男が小倉郷土会に立ち寄る。前列左から3人目が柳田國男。後列左から3人目が川崎英一、4人目が曾田共助。  
馬渡博親 編『小倉郷土会のあゆみ』（2002）より転載



ぎない。おそらく、当時、日本のそここで、こうした在野における知の邂逅が芽吹いていたに違いない。各地に郷土研究の団体が簇生していたからだ。柳田國男たちは、こうした各地の団体を訪れては、あらたな学である民俗学へと誘っていた。小倉郷土会には、柳田の側近だった橋浦泰雄そして柳田本人が、九州での講演会や、当時「民間伝承の会」が企てていた山村調査の帰途に立ち寄った。杉浦の訪問も、そうした動きのひとつであった。

民俗学史は、こうした昭和初期の動向を、柳田が民俗学へと各地の郷土研究の団体を組織化していく過程として語る。しかしわたしたちは、実際は、これらの在野の知は、そう簡単に民俗学になびいたわけではない、と考えている。例えば、小倉郷土会では柳田たちを大歓迎しながら、会としての実践そのものは、決して民俗学へ収斂したわけではなかった。

その関心は文献資料を使った郷土の近世史、考古学、自然史、そして特に幕末期に長州軍との戦いで街が焼け野原になり多くの史資料が失われたことを埋め合わせるための古老への聞き書きなどに力が注がれていた。あくまでも民俗学は、彼らの活動の選択肢のひとつであった。

また郷土会の同人たちは、俳句や短歌

の同人などにも同時に参加し、その活動は複数のジャンルにまたがり重層的であった。そして小倉郷土会は、福岡や豊前地方、下関などの団体とも活発なつながりがあったことが確認できる。そこからは、民俗学史が語る、柳田による中央集権的組織化の過程とは異なった様相が見えてくる。

柳田とその周辺は、各地の知の実践をひとつの中心にまとめ上げたというより、結果的に、運動を地域を越えて横につながる、またあらたな知の刺激を橋渡しする媒介のひとつだったのでないだろうか。

今回の共同研究会は、特に各地の在野の知性に見られる多様なジャンルにまたがる横断性と、地域を越えるゆるやかな集団間のつながりのありように注目し、従来の学史の語りを相対化するとともに、在野の知がもっていたしなやかさを捉えなおすことを目指している。

民博共同研究  
「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで」  
2010年10月～2013年3月  
代表者：重信 幸彦